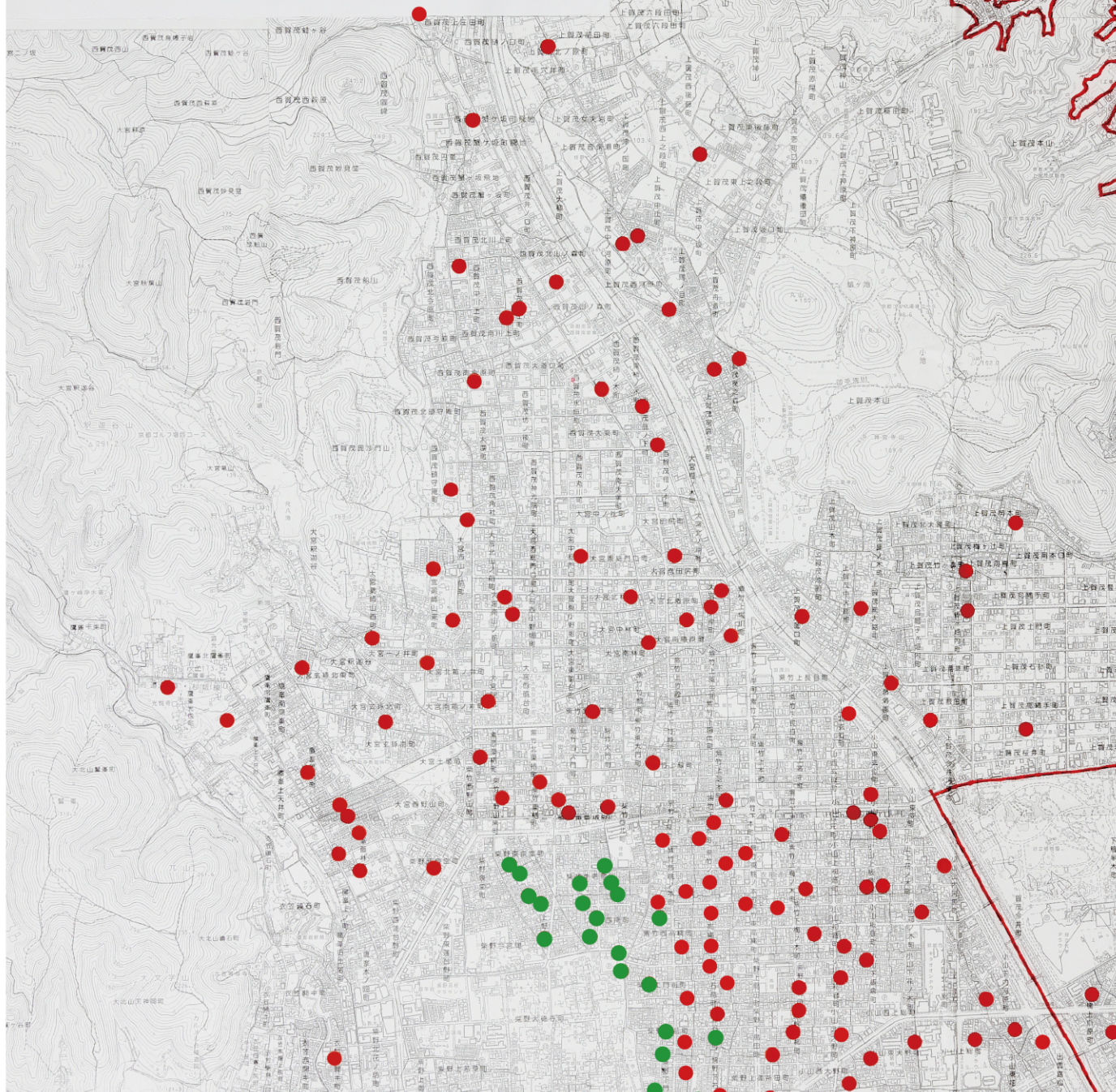
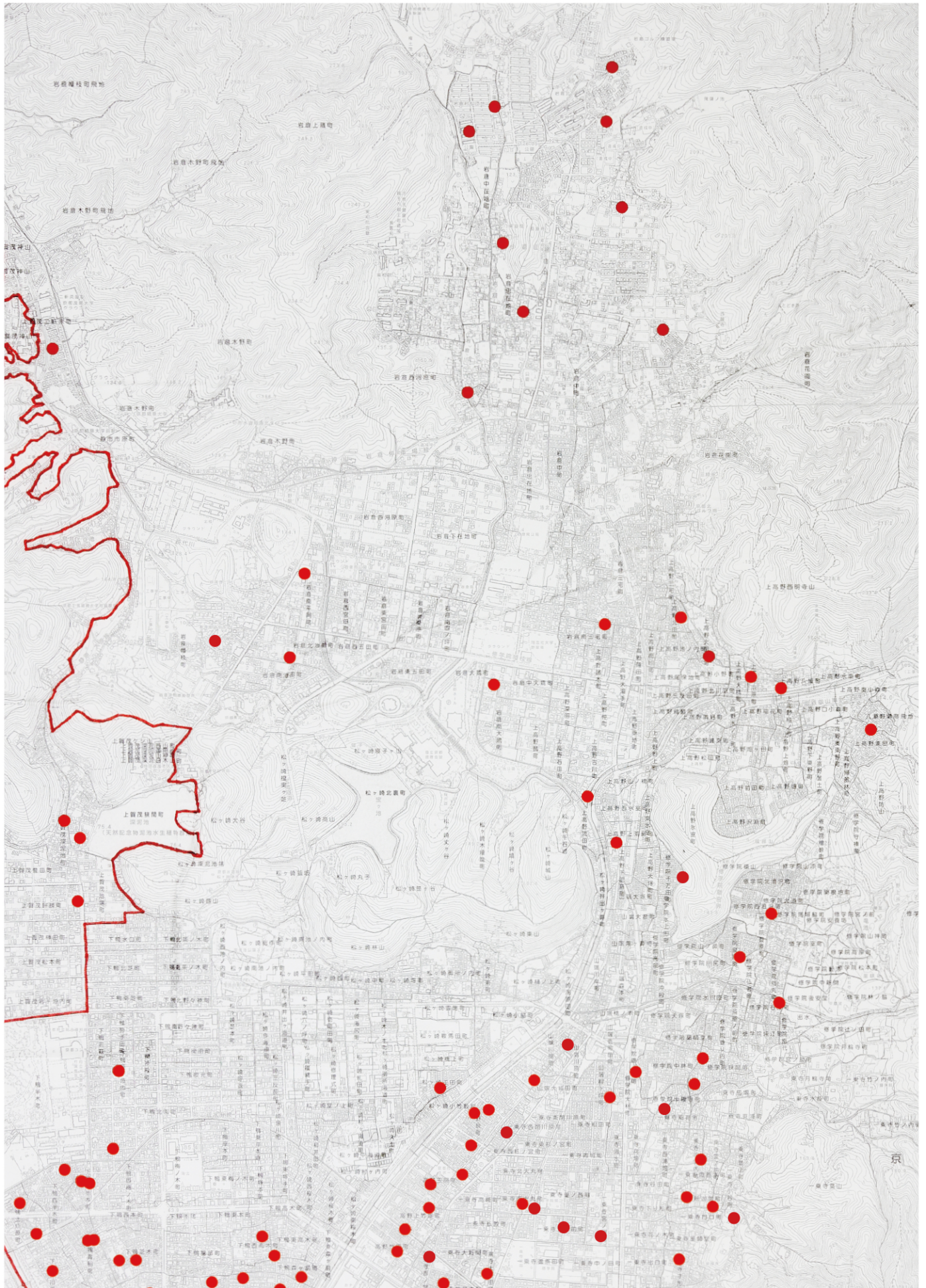


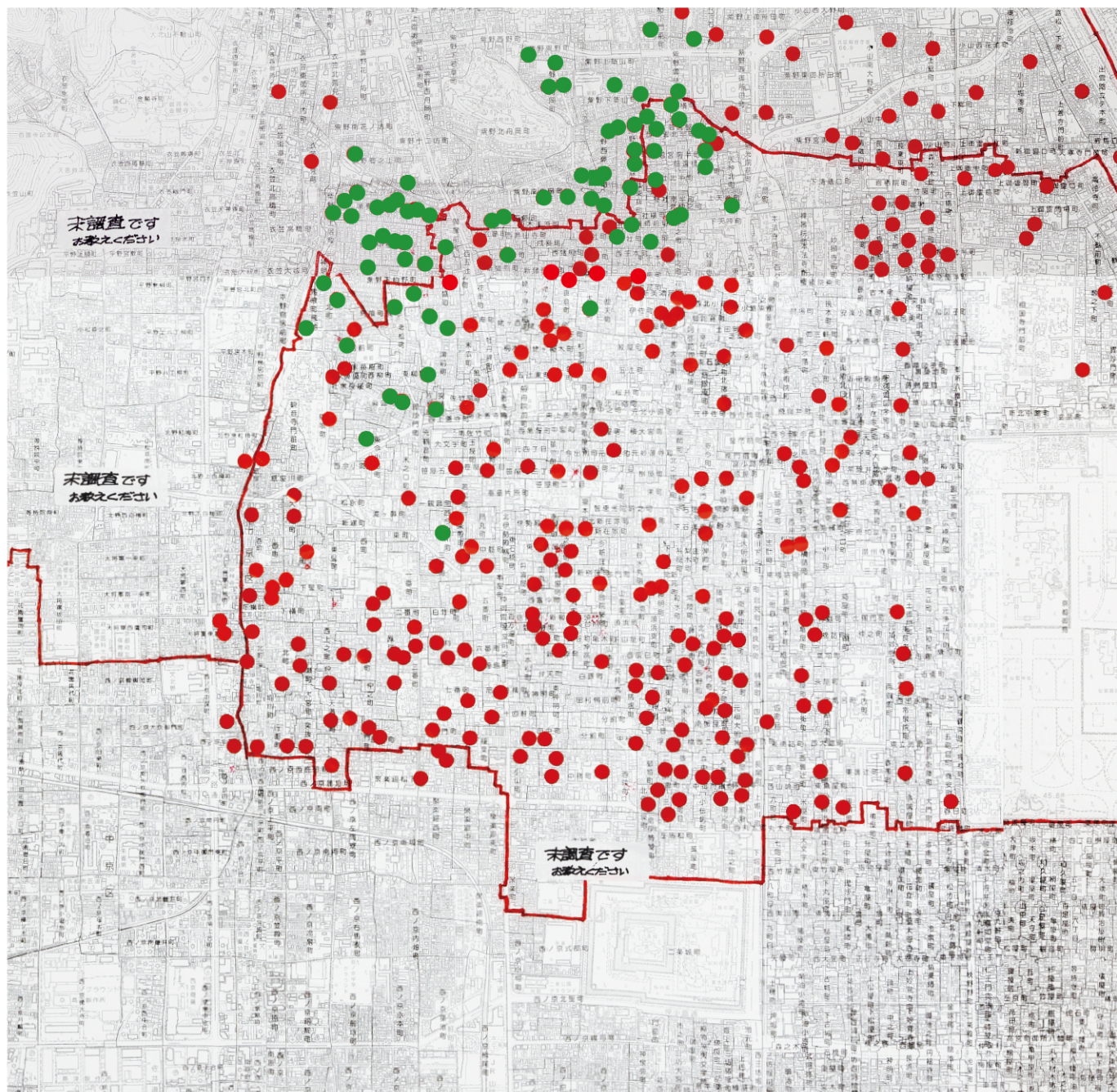
地藏盆 MAP

- 8月22・23日前後の土日曜日
- 8月14～16日

2010年～2019年に確認したものを記入した
会場を変更したところをZヶ所に また現在は開催
していないところもあります



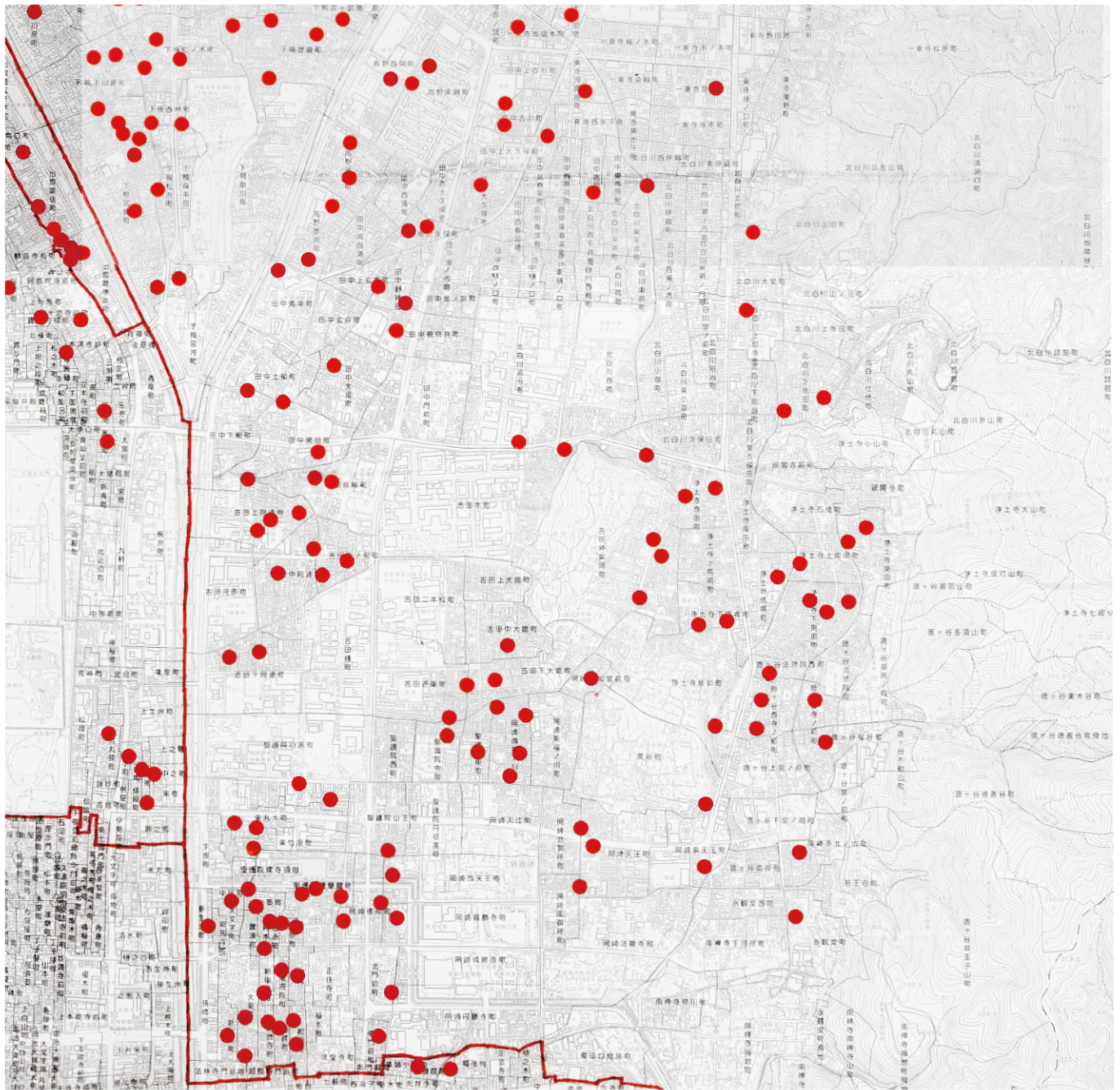




「神谷潔さんが見た京の地蔵盆」について

京都生まれ、京都市育ちの写真家・神谷^{かみや きよし}さんは、京都の街の日常風景、鉄道(かつての市電も含む)などを対象に撮影を続けてこられました。特に、京都の地蔵盆にのめり込んだきっかけは、阪神淡路大震災(1995年1月17日)の後、神戸を訪れたことが転機だったそうです。震災後の神戸で痛感した、日頃のご近所との人間関係の大切さ。地蔵盆を訪れると、普段では見えないその地域の様子が、ほんとうによく見えてくるのです。

上賀茂に住む神谷^{かみや}さんは、毎年、地蔵盆の季節になると自転車車で回れる範囲—おおよそ丸太町通から北のエリアに絞って、路地の奥の奥までつぶさに地蔵盆を訪ねて回ります。地域住民にとっては、毎年見かける顔。子どもたちにとっては「いつものカメラのおっちゃんや」といった感じなのでしょう。



今回、「京都の祭り・行事展」で展示した写真は、平成23年(2011)から令和元年(2019)までに撮影した写真からテーマごとに分類していただき、コメントも執筆していただきました。また、コロナ禍の地蔵盆として令和3年(2021)の写真レポートも準備していただきました。

14～17頁の「地蔵盆MAP」は、神谷さんの頭の中にある、撮影して回った地蔵盆の開催場所を、地図に落とし込んだものです。令和2年(2020)8月7日～9月24日に京都市歴史資料館で開催されたテーマ展「京の地蔵盆」では637箇所が示された地図でしたが、加筆修正した結果、695箇所になりました。(福持昌之)

- 参考文献 ■ 神谷潔「京都の地蔵盆を撮り続けて」(『映像で見るお地蔵さんと地域社会—民間信仰共同研究会7年の歩みから—』神道国際学会、2008年)
■ 『京の地蔵盆』(京都市歴史資料館、2020年)

京都の地蔵盆

京都市は、平成26年(2014)11月20日、京都をつなぐ無形文化遺産制度の第3号として「京の地蔵盆―地域と世代をつなぐまちの伝統行事」を選定した。この選定に先立って、平成25年度に自治会や町内会に対してアンケート調査を行った(配布数6,590、回答数3,721、回答率56.5%)。その結果、回答中76.9%で地蔵盆を開催しているとあった。

地蔵盆とは、盆^{ぼん}の月^{つき}の地蔵菩薩^{えんにち}の縁日^{えんにち}(24日)の祭である。江戸時代の文献には「地蔵祭り」と見え、旧暦7月に行われていたが、明治以降に8月の行事として、名称も「地蔵盆」が定着するようになった。

地蔵菩薩の縁日は24日であるが、宵^{よい}縁日^{えんにち}つまり前日23日の晩の儀礼に比重が移る傾向があり、23・24日の両日にわたって行われることもある。その後、その前後の土曜日・日曜日に行われることが多くなり、またお盆の15日頃に前倒しで行われる例もある。北区、左京区、上京区を中心に長年、地蔵盆の写真を撮影されてきた神谷^{かみ}潔^{やきよし}氏によれば、北区紫野などいわゆる西陣と呼ばれる地域で14・15日の開催が多いという。

京都の地蔵盆は、自治会や町内会、あるいは隣組といった数軒から十数軒といった小さな地域集団で開催されることが多く、地域の子供達を集めて楽しんでもらうという目的で、さまざまな趣向が凝らされるのが特徴である。したがって、地蔵盆の準備は、ほぼ大人だけでおこなわれる。

地蔵盆の儀礼的な要素としては、地蔵を祭る仮設の祭壇^{ほくら}を設けたり、地蔵の祠^{あんどん}やその周辺を行燈^{しょうこん}などで荘厳したりする。また、石地蔵の場合、水洗いをしたり、絵の具で顔を描き直したり(化粧する)こともある。地域住民の有志の御詠歌^{ごえいか}や、近隣の寺院から僧侶を招き、読経^{どきょう}や数珠繰り^{じゆずく}(数珠回し)をおこなうこともある。数珠繰りは、地域や宗旨によって、念仏(南無阿弥陀仏)の場合と、読経(般若心経など)の場合がある。また、娯楽的要素としては、水遊びや各種レクリエーションゲーム、大学生やセミプロを招いての歌や音楽、手品や落語や人形劇などの出し物鑑賞、スイカ割り、くじ引きや景品を高いところから下ろしてくるフゴおろしなどがあり、夜には花火大会、盆踊り、大人たちの宴会などがある。

	お菓子配り	福引	一式飾り	僧侶の読経	数珠回し	お地蔵さんのお化粧	ご詠歌	盆踊り	ふごおろし	その他	無回答
全体	90.5	67.5	59.4	52.1	42.5	36.6	10.2	1.8	1.1	38.2	1.1
北区	93.2	73.4	61.6	57.0	52.1	31.2	6.5	1.1	0.8	37.3	1.1
上京区	93.9	65.8	72.5	57.2	66.0	24.9	3.7	0.3	2.4	38.2	0.0
左京区	93.3	68.6	49.4	40.4	28.2	39.2	15.7	2.0	1.6	48.6	2.7
中京区	92.1	66.1	68.8	58.7	53.4	30.4	8.7	1.1	1.6	35.7	0.0
東山区	80.9	54.3	62.8	60.1	33.5	37.8	4.3	1.1	0.5	37.8	1.1
山科区	94.0	80.8	45.5	46.1	31.1	41.3	2.4	3.6	1.2	42.5	1.8
下京区	84.2	53.0	65.8	67.1	41.3	31.5	6.0	0.7	0.7	29.5	0.7
南区	88.0	62.3	55.7	52.7	16.8	59.3	7.8	0.6	0.0	39.5	1.2
右京区	94.4	86.0	51.4	50.0	27.6	42.3	12.9	1.7	0.7	37.8	1.4
西京区	88.5	76.0	36.5	30.8	17.3	25.0	8.7	10.6	0.0	46.2	3.8
伏見区	90.6	65.5	58.6	39.6	51.3	46.2	25.4	2.8	0.8	38.6	0.8

地蔵盆で行った行事 (数値単位は%)

出典:村上忠喜「地蔵盆」に関するアンケート調査結果」(「京都市文化財保護課研究紀要」創刊号,2018年)

地蔵菩薩は、仏教の信仰の対象であるが、地蔵盆のシンボルである「お地蔵さん」は、木造や石造の地蔵菩薩に限らず、ほんやりと人型とわかる石造物であったり、五輪塔ごりんとうであったり多様である。また、歴史的に見ても地蔵信仰は、特定の宗派・教団には依拠しておらず、地域ごとに土着の民俗信仰あるいは民俗行事として定着してきた。お地蔵さんの祠の多くは個人宅の敷地の一郭にあり、住民相互の連携の中で維持管理されてきたことがわかる。地蔵盆は、まさに生きている民俗行事であり、新築マンション等において新たにの地蔵盆の行事が始められたり、昔からの地蔵盆が「夏祭り」と名前を変えて継続されていたり、そしてコロナ禍における感染症対策対応など、様々な事象がみられる。京都において地蔵盆は、初詣はつもうで、盆行事と並んで、年中行事として欠かせない存在である。

(福持昌之)

	京都市内	小浜市	舞鶴市	宮津市
① 地蔵盆の歴史	江戸時代 寛文二（1662）年～	江戸時代 明和四（1768）年～	江戸時代 安政三（1856）年～	江戸時代 弘化四（1836）年～
② 地蔵像の 日常安置場所	古くは地区の辻角	地区の入口や 辻の入口	決まりはない	隣組の中で 決まりはない
③ 地蔵盆の 信仰観念は	現世利益	現世利益	現世利益 (死者供養があった)	現世利益
④ 地蔵盆の 主願は（現在）	子どもの健全な育成・ 成長と町内の安全	子どもの育成と 町内の親睦や健康	地域住民の絆と町内 の安全と住民の健康	子どもの 健やかな成長
⑤ 地蔵像や祠の管理	近隣の住民	町内会（月当番）	町内会（月当番）	隣組
⑥ 地蔵盆日の変遷	8月23・24 → 土・日が多い	8月23・24日	8月23・24日 → 土・日が多い	8月23日が ほとんどの地区
⑦ 地蔵盆の主体は	子ども	子ども	子ども	子ども
⑧ 地蔵盆の 開催場所は	駐車場や道路に テント張る	地域会館や地蔵小屋	地域の自治会館	隣組の常会で決める
⑨ 地蔵盆の準備は	全て町内会役員や 長老	ほとんど子どもが 主体（重労働は大人）	町内会役員と子ども	隣組の役員や長老、 一部子ども
⑩ 地蔵盆の費用は	寄付	寄付と町内会費一部	寄付と町内会費一部	隣組戸数割
⑪ 地蔵盆の飾りは	祠や石像の前に 香華・供物	会館内に段飾りで 石像や香華・供物	段飾りで最上部に 金色の御厨子・仏像	舞鶴に類似している
⑫ 地蔵像の彩色は	彩色は 顔に白粉と口に紅	殆どする、 石像全体に極彩色調	同左	同左
⑬ 地蔵（石仏）の 像容は	大多数は像容不明瞭、 石の感じ	京都より、 ただの石に近い	小浜の地蔵像より、 像容が明瞭	同左
⑭ 賽銭の強要	なし	勧進、現在も行われ ている（1箇所）	舞鶴市史に記述が ある。現在はなし	なし

表作成：近石 哲

府下の地蔵盆

京都府舞鶴市の地蔵盆

舞鶴市の地蔵盆は、西舞鶴が中心で東舞鶴には地蔵盆の伝承は少ない。地蔵盆に関して『市史』に数行の記述があるぐらいで文字による伝承は僅少と言える。紙幅から地蔵盆の伝承の中で、他の地域にない独自で特徴的な祭祀（祭壇等々）事例を紹介する。

祭壇設置や祭祀開催場所は、古くはその年に「新盆」の「精霊迎え」をするお宅で地蔵盆を行っていたらしい。最近では、住宅事情等々もあり大多数の町内会は町内会館や集会所（1箇所／地区）で開催している。

特徴的なことは、祭壇飾りの最上段に祀る通称「御厨子」^{おずし}、「厨子」と呼ばれるものである。「金色の御厨子と地蔵菩薩立像」は京都・若狭地域や全国的に見ても、舞鶴だけの特徴・伝承であろう。御厨子（厨子）等々の祭壇飾りについて、少し詳しく見ていくことにする。

旧舞鶴市（旧舞鶴とは西舞鶴）の地蔵盆飾りは市内全般的にやや同様であり、写真資料のように中央の御厨子に「金色の地蔵菩薩立像」が安置されて、金色の花瓶・蠟燭立て・香炉・高坏など荘厳な祭壇である。地域によって金箔仕上げの御厨子は古くからの伝承であり、御厨子以外は真鍮造りの仏具である。ちなみに、この御厨子の伝承は江戸時代からであり竹屋町の御厨子収納箱蓋には「安政3年7月」の墨書が確認できる。さらには、明治時代からの地区が多く、例えば本町では「明治44年」、丹波町では「明治32年」と御厨子の収納箱蓋に墨書があり、祭壇幕白抜きの染めに年代が確認できる。

以上のように、地域（町内会）を中心にして守られている既成仏教教团的な飾りのこの地蔵盆は、他の地域には類を見ない舞鶴市だけの特徴であると言えよう。しかし、極めて珍しい祭壇飾りの発生、由来、背景については不明である。（近石 哲）



金色の厨子中央部に地蔵菩薩立像（竹屋町）



上巳の節句のような祭壇飾り（本町）

参考文献 ■ 近石 哲『地域社会における民俗信仰—祭祀諸相にみる地域別受容と展開の様式』日比谷出版社、2019年

府下の地蔵盆

京都府宮津市の地蔵盆

宮津市の地蔵盆は、小浜市・舞鶴市と同じような行事内容である。宮津でも辻角^{つじかど}に安置される地蔵は数多い。調査資料は地域文化に詳しい本村昭吾氏^{ほんむら}より提供して戴いたものである。

宮津では、地蔵マップ「宮津のお地蔵様」（宮津美しさ探検隊：企画・制作）を制作し広く発信をしている。また、舞鶴市のように、箱書きや銘文が確認できた。しかし、地蔵盆の起源とするには決定的な論証とは言えないであろうと考える。

宮津での地蔵盆を簡略に述べると、市内の大多数の地区では、開催日の23日は朝早くから町内会（隣組）役員や長老が祭壇・幕や供物を準備して、20日位からお地蔵さん洗いを^{ほくら}して化粧直しをした地蔵を最上段の中央部に祠（木製厨子^{ずし}）の中に安置する。

その年の地蔵盆開催場所は、隣組（20～30世帯）の常会を8月10日頃に開いて決める。会館がない組は、個人宅の駐車場や空き地で行っている。

地蔵盆の費用は、組内の戸数割りで、地蔵や祠の日常管理も輪番で行う組や決まった人（専任）がいる組と様々である。念仏や数珠回し、僧侶の読経はマチ部では行わず、夕方から女性による御詠歌（西国三十三所観音霊場^{ごえいか さいごく}）を唱える。農村部（ムラ）では、僧侶による読経を行う地区もある。地蔵盆当日は、子どもたちがトランプをしたりして遊んでいる。宮津には、小浜市・舞鶴市・但馬地方にみる「賽銭強要^{さいせん}」はないということである。

宮津でも小浜市や舞鶴市と同じような地域独自と言える、地蔵像彩色（化粧地蔵^{さいしき しゅうぞく}）の習俗がある。各々の地域で独特な行事内容の特徴の一つということが出来る^{たじま}と考える。地蔵の彩色（化粧）習俗は、京都・若狭・舞鶴・宮津と滋賀県西部を中心とした分布を示す、近畿北部の習俗と言えよう。地蔵の彩色（化粧地蔵）に関しては稿を改めたい。

（近石 哲）



祭壇中央に彩色（化粧）地蔵を祀る



祭壇の前で子ども達が遊ぶ風景



収納箱「弘化三年七月」の墨書き

参考文献 ■ 近石 哲『地域社会における民俗信仰—祭祀諸相にみる地域別受容と展開の様式』日比谷出版社、2019年

京都周辺の地蔵盆

福井県（若狭）小浜市の地蔵盆

小浜市^{にしづ}西津地区は 12 区に分かれていて、安置されている地蔵像は「37 体」、地蔵盆会場は「31 箇所」である。地区の数より地蔵像の数が多いのは、1 体／区ではなく、例えば下竹原区など地区の辻々に安置して合計 6 体である。

盂蘭盆会^{うらぼんえ}が終わってから、地区の各辻角の祠^{ほこら}に安置されている石仏の地蔵を取り出し、海でその彩色^{さいしき}（化粧）を洗い落とす。これはすべて子どもの仕事であるらしい。地蔵洗い後は、各町内会の子どもたちが地蔵像に着色・彩色する。古くはベンガラや岩絵具^{いわえのぐ}（群青・緑青・黄土等々）であったが、現在では絵具（ポスタカラー）油性ペンキなどで自由な色を使って地蔵像に着色・彩色する。この地蔵を「化粧地蔵」と呼称する。また、最近では地蔵を 2 体安置している町内会が多く、「男地蔵と女地蔵」としている。男地蔵のほうが大きくて、その彩色も派手に塗り、女地蔵は小さい石像で彩色も穏やかな感じを受ける。

この後は、21・22 日に「お堂」を組み立てる。戦前は、各町内会で 1 箇所ずつ建てられたが、ここ数十年前からは少しずつ減り、現在は「仲ノ町のお堂」と「七軒町のお堂」の 2 箇所だけになった。お堂が減りつつある原因は、子どもたちが少なくなり寝泊りする子がいなくなったり、火事で焼失したり老朽化して補修できなくなったり高齢化で組み建てられなくなったのが要因である。お堂がない町内会は、現在では各地区に町内会会館が建てられているので、個人宅ではなく会館で祭壇・飾り付けを行っている。

新しく始めた行事に、2011 年から西津地区「31 箇所」地蔵盆会場での「地蔵盆コンテスト」を行っている。主旨・目的は、この伝承を絶やすことなく後世に継承することと地域の活性化をめざし独自の西津地蔵盆を広く発信するためであるという。さらに少子高齢化という時代背景から、この伝統行事の衰退を危惧して住民の積極性を高揚させようということも隠れた目的の一つでもあるらしい。（近石 哲）



祭壇上部に彩色（化粧）地蔵を祀る



子供の手造り「灯路」(左)と「幡」(右)



祭壇飾りや子供の宿泊する「地藏小屋」

参考文献 ■ 近石 哲『地域社会における民俗信仰—祭祀諸相にみる地域別受容と展開の様式』日比谷出版社、2019年

京都周辺の地蔵盆

滋賀県 湖東の地蔵盆

京都に隣接する滋賀県でも、地蔵盆は盛んである。ここでは、湖東地方の地蔵盆を例に紹介したい。

湖東地方の地蔵盆の特色のひとつは、重層的な地蔵盆がみられることである。例えば、自治会や町内会(以下、ムラという)で地蔵盆が行われ、そのムラを構成するいくつかの隣組(以下、クミという)の地蔵盆がある。さらには個人宅でも地蔵盆の行事が行われる。個人の地蔵盆であっても、僧侶を呼んでのお勤めがあり、また近所の子供たちのお参りがあるため、お菓子を用意したりする。子供たちは、ムラやクミの地蔵盆のいずれかに属しているが、他の地蔵盆の場所をお参りに回ってお下がりのお菓子をもらう。すべての地域でこの3層構造がみられるわけではないが、2層構造がみられる地域は多い。

もう一つの特徴は、地蔵盆がムラの年齢階梯制に位置づけられていることである。地蔵盆は、大人の助けを得ながらも、小学生が地蔵を洗い、祭壇を作り、行燈に絵を描いて準備をする。さらには、奉願集めといって、近所の家々を訪ね歩いて御布施などを集めるのも子供の役割である。地蔵盆の当日、子供たちは自分たちで考えたレクリエーションプログラムを実施したり、お地蔵さんの祭壇を管理する当番表を作って留守番役と、他地区の地蔵盆を見に行くグループに別れたりもする。留守番役は、地域住民のお参りがあると名前を帳面につけたり、お下がりを受けたりする。地蔵盆が終わると、集まったお供えをお参りのあった軒数分に分けて、翌日に配り歩いたりする。かつては、地蔵盆の日は、地蔵堂に子供達だけで泊まったという話も聞く。地蔵盆の役を卒業すると、次はムラの若連中(若中)に入り、地域の神社祭礼の実働部隊になっていく。

ムラの年齢階梯

小学生 → 若連中 → 中老 → 長老
地蔵盆 → 神社祭礼(神輿など) → 寺世話

湖東地方は、浄土真宗の影響が強い。浄土真宗は「弥陀一仏」と言われるように、阿弥陀如来の信仰が中心であり、地蔵菩薩など他の仏菩薩を信奉することは推奨していない。したがって、本来、僧侶は地蔵盆とは無縁のはずであるが、実際には檀家からの要望をうけて、「つきあい」として地蔵盆にお参りに行く僧侶は多い。

ところで、浄土真宗の最大の儀礼は、宗祖親鸞聖人の命日の追善供養である報恩講である。報恩講は、本山で命日に行われるほか、末寺においても行われており、本山と時期が重ならないよう日程を取り越して(早めて)行うことから末寺の報恩講を「オトリコシ」とも呼ばれる。さらに各檀家においても、物故者の年忌法要等にあわせて報恩講を行うことから、浄土真宗の門徒にとって報恩講は3層構造になっている。つまり湖東地方の地蔵盆が重層的なのは、浄土真宗の影響を受けているとも考えられる。

地蔵盆の重層構造

ムラ — クミ — イエ

報恩講の重層構造

本山 — 末寺 — 門徒宅

(福持昌之)

参考文献

- 『お地蔵さんと地蔵盆—こどもたちの祝祭 地蔵盆から—』
愛荘町愛知川観光協会、2008年
- 福持昌之
「湖東のお地蔵さんと地蔵盆
—イエ地蔵・クミ地蔵・ムラ地蔵—」
(『映像で見るお地蔵さんと地域社会』2008年)

ねじれの構造

〈浄土真宗の教え〉 〈湖東の地蔵盆〉

弥陀一仏の信仰 ⇒ ×受容せず
地蔵盆も行う

報恩講を家庭でも ⇒ ○受容する
地蔵盆を家庭でも

京都周辺の地蔵盆

大阪府野田のななとこまいり

「ななとこまいり」で知られる大阪市福島区野田の地蔵盆。「地蔵盆の時に地蔵を7箇所お参りすると願いごとが叶う」と野田地域に昔から伝わる風習で、ナナカショマイリとも言う。およそ夕方か夜に行い、それぞれが自由にお地蔵さんに願いごとをする。野田の地蔵盆は日が暮れてからも行っているところが多く、地蔵盆の日に盆踊りをする町も多かった。しかし現在では、盆踊りもななとこまいりをする人も減ってしまい、お地蔵さんのお世話をしている方たちもすこし寂しそう。

[01]延命地蔵・子どもの災難が続いたときに、焼け跡から拾ってきたお地蔵さん。「地蔵尊」と書いた木札の家が地蔵当番。20軒ほどの路地で今でも交代しながらお世話をしている。

[02]柳原地蔵・目の神様と足の神様の2人組のお地蔵さん。戦前には地べたに置いていたが、お堂を作ってお祀りすることになり、「地べたから出世しはった。」と言われている。

[03]北向火除地蔵・周辺でも一番の古株。100年ほど前、震災で川から流れてきた地蔵を拾い、大町会という村の有志がお祀りしたそう。お地蔵さんのおかげで空襲でも焼けずに助かったという話もある。

[04]堤地蔵・野田がまだ村だった頃、川から流れてきたお地蔵さん。堤とは昔の字の名前。

[05]玉河塩屋地蔵・1メートルを越す大きな立像で、野田の中では最も大きい。約500年前に岡山県の庄屋の家に建立されたお地蔵さんが昭和28年に野田へ移住してこられた。古い立派なお地蔵さんである。

[06]同慶地蔵・高野山の別院扱いで、60年以上前からお祀りされている。昔は「延命地蔵」だったがいつのまにか「出世地蔵」になったりとあやふやである。「同慶」とは昔の町内会の名前である。

[07]源正地蔵・100年ほど前、産後の肥立ちが悪かった娘のために、天王寺からもらってきてお祀りしたのがはじまり。石像を中心に木像が3体、計4体ある。

[08]新堀北向地蔵・大きい方の北向地蔵は、川に流れてきた地蔵を安治川沿いに祀っていたが、中央卸売市場改築の際にここへ移した。小さい方の新堀地蔵は、100年ほど前に油商を営む人が拾ってきた木像を、拾った人の息子が彫った石像に置き換えたのだそう。

[09]出世地蔵・終戦後、天王寺から持って帰ったお地蔵さんをお祀りしていたが、今は天王寺に返し、新しく作り直した2代目のお地蔵さんに代わっている。

[10]子安地蔵・戦前、子どもを亡くした方がお祀りしたお地蔵さんで胸に子どもを抱いた姿をしている。子どもの部分をさすりながら願掛けをする風習があり、その部分だけはけてきている。

[11]兼平地蔵・戦前、川から流れ着いたお地蔵さん。祠の下には井戸がある。この井戸は戦前、共同炊事場として利用していたもので、今でも水替えなど普段のお世話に利用している。数年に一度、近所の子ども達が化粧直しをする。

[12]源吉大明神・野田の人気者、源吉たぬき。今の場所に来た際、お性根を入れてもらうため行者に拜んでもらったところ「自分は源吉という者だ。」と名乗られた。戦争中に火災が少なく済んだのは源吉大明神のおかげ、と「火の神様」としても信仰されている。

(長尾智子)



マップ制作：長尾智子

参考文献

- 池ヶ谷みち子「都市化地域における地蔵信仰」(2006年度、神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科修士論文)